

日本脂質生化学研究会

会 報

1983年2月

日本脂質生化学研究会

(J C B L)

58年度会費払い込みのお願い

○ 昭和58年度の会費は、仙台での総会の席上で3,000円に値上げすることが承認されましたが、決算いたしましたところ58年度も2,000円の会費でやっていけることがはっきりしました。そこで総会の議決は、勿論有効としなければなりません、その執行をしばらく延期して58年度は従来どうり2,000円の会費で運営したいと思います。

○ 昭和58年度会費2,000円を、3月末までにはさみ込みの振替用紙でお払込みください。

本年度の講演集の作成に必要ですので、明日にせず、今日お払い込みください。

○ 振替用紙は1人1枚お使いください。不足の場合は郵便局の窓口に備えつけの用紙をご利用ください。

会費送付先 振替番号 東京4-91400 日本脂質生化学研究会

○ 本年度より入会希望の方は、事務局までハガキでご一報ください。そして、入会金1,000円+昭和58年度会費2,000円=合計3,000円を前記同様に郵便振替でお送りください。なお、振替用紙通信欄に新入会とお書きください。

○ 本年より退会なさる方は、ハガキでご一報ください。

(事務整理の都合上、2年間滞納の場合は自動的に退会扱いといたします。)

○ 本会報の受け取り人が、海外へ出られたり、或いは他の場所へ転出された時は、お手数ですが返送または、転送をお願いします。

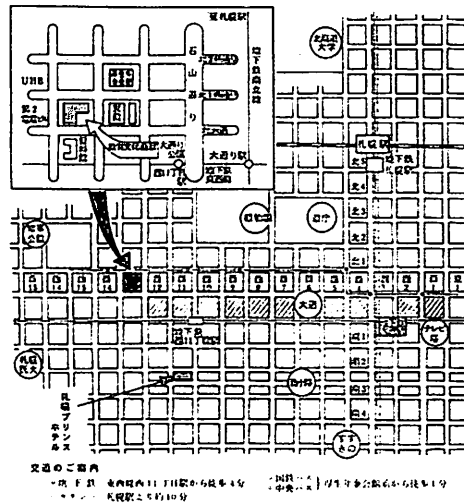
事務局(〒173)東京都板橋区加賀2-11-1 帝京大学医学部第一生化学教室

日本脂質生化学研究会事務局 TEL(03)964-1211

(内線)2320, 2321

..... 今日、お払い込みください

会場案内図



宿泊に関する御案内：札幌駅および会場周辺の宿泊施設を列挙しました。御希望の方は、北海道神宮祭と重なりますので、できるだけ早目に直接御申し込み下さい。

ホテル名	住所	電話番号	料金
① 札幌グランドホテル	札幌市中央区北1条西4丁目	011-261-3311	10,000~30,000
② 札幌プリンスホテル	〃 南2条西12丁目	011-231-5310	
③ センチュリーロイヤルホテル	〃 北5条西5丁目	011-231-2331	
④ 京王プラザホテル	〃 北4条西7丁目	011-271-0111	
⑤ 札幌東急ホテル	〃 北4条西4丁目	011-231-5611	
⑥ ホテルアルファサッポロ	〃 南1条西5丁目	011-221-2333	
⑦ すみれホテル	〃 北1条西2丁目	011-261-5151	5,000~
⑧ 札幌第一ホテル	〃 大通西10丁目	011-221-1101	6,500~
⑨ ホテル丸窓	〃 北1条西3丁目	011-221-0111	6,000~
⑩ ホテル札幌会館	〃 北17条西4丁目	011-721-1341	4,500~
⑪ ホテルニューミヤコシ	〃 北2条西3丁目	011-221-2141	5,500~
⑫ ホテルリッチ札幌	〃 北1条西3丁目	011-231-7891	6,000~
⑬ ホテルワシントン札幌	〃 北4条西4丁目	011-251-3211	4,300~
⑭ チサンホテル	〃 北2条西2丁目	011-231-8441	4,400~
⑮ フジヤサンタスホテル	〃 北3条西7丁目	011-271-3344	4,950~
⑯ 厚生年金会館	〃 北1条西12丁目	011-231-9557	4,000~
⑰ 大通公園ホテル	〃 大通西8丁目	011-261-0121	4,500~
⑱ ホテルライラック	〃 大通西17丁目	011-611-5191	3,000(5/25)4,000(5/26)
⑲ ホテルヒグマ	〃 大通西18丁目	011-642-5161	4,400~
共済組合等宿泊所			
㊤ 北海道会館	〃 北1条西6丁目	011-261-5311	各 所 協 会 組 合 に よ っ て 設 け ら れ て い ま す
㊦ エルム会館	〃 北1条西7丁目	011-231-1361	
㊨ グリーン札幌	〃 北1条西11丁目	011-281-2648	
㊩ 札幌弥生会館	〃 北3条西12丁目	011-271-2511	
㊪ 北海道庁共済会館	〃 北3条西18丁目	011-621-0216	
㊫ 円山荘	〃 北3条西24丁目	011-631-6902	
㊬ 札幌共済会館・石狩会館	〃 北4条西5丁目	011-231-6711	
㊭ 北海道自治会館	〃 北4条西6丁目	011-241-9111	
㊮ 札幌宿泊所・清風荘	〃 北6条西17丁目	011-631-2266	
㊯ 札幌会館・ホテルアカシア	〃 南12条西1丁目	011-521-5211	
㊰ ホテルノースシティ	〃 南9条西1丁目	011-561-6291	
㊱ 札幌会館	〃 南28条西9丁目	011-531-1517	

第25回 日本脂質生化学研究会のお知らせ

- ① 会場 札幌市教育文化会館（札幌市中央区北1条西13丁目） Tel. 011-271-5821
期 日 1983年6月16日（木）～17日（金）
実行委員 板上利夫教授（札幌医科大学 第二生化学教室）
- ② 研究会参加費用 参加費 3,000円を予定しています。
- ③ 懇 親 会 研究会 第1日（6月16日）の発表終了後にいたします。
会 場 札幌プリンスホテル（札幌市中央区南2条西11丁目）
Tel. 011-231-5310
会 費 4,000円を予定しています。

特別講演会（前夜祭）のお知らせ

来る第25回日本脂質生化学研究会に先だって、前夜祭として下記の特別講演会を開催いたしますので、多数ご参加頂き、ご討論下さるようお願いいたします。

- 日 時 6月15日（水）午後5時より約2時間の予定
会 場 札幌プリンスホテル（札幌市中央区南2条西11丁目） Tel. 011-231-5310
会 費 無料
演題・演者・（座長）

1. 血清リポタンパク質の分析と医学への応用
東京医科歯科大学・教授 原 一郎氏（座長 今井 陽氏）
2. 糖脂質の遺伝
東京都臨床医学総合研究所・所長 山川民夫氏（座長 牧田 章氏）

昭和58年度 日本脂質生化学研究会総会のお知らせ

上記総会を昭和58年6月17日（金）正午（プログラム編成の都合上若干の変更はあるかもしれませんが）より研究集会第1会場において開催いたします。ご出席賜りますようご案内申し上げます。

会長 原 一郎

- 議 題 1. 昭和57年度事業報告
1. 昭和57年度決算報告ならびに監査報告
1. 昭和58年度事業計画ならびに予算案
1. そ の 他

以 上

昭和58年度 日本脂質生化学研究会幹事会のお知らせ

上記幹事会を昭和58年6月16日（木）正午（プログラム編成の都合上若干の変更はあるかもしれませんが）より札幌市教育文化会館特別会議室に於いて開催いたします。幹事の皆様のご出席をお願いいたします。

会長 原 一郎

- 議 題 1. 昭和58年度日本脂質生化学研究会総会への提案事項の検討
1. そ の 他

以 上

* 幹事の皆様には別途ご案内申し上げます。

* 尚、昼食代1,000円を申し受けます。

研究集会発表演題の募集

今年の研究集会は一般演題、シンポジウムとも口頭発表を原則といたします。ただ、会期を2日間としてありますので申し込み演題数の多い場合には、幹事会、実行委員のメンバーで、申し込み講演要旨を読ませて頂き、止むを得ず誌上発表をお願いするかもしれません。それは研究内容の優、劣を判断するのではなく、誌上発表で十分理解できる演題かどうかを判断基準とさせていただきます。よろしくご協力願います。

① 演題の申込み

1. 一般演題

口頭発表

発表 15 分 討論 5 分

2. シンポジウム

発表 20～25 分，総合討論時間を設けます。

- A. 主題 「脂質の transfer (exchange) の機構」
B. 主題 「複合脂質の代謝異常」

3. 発表時間は変更することがあります。

同一演者の複数の演題申込みはご遠慮下さい。

やむをえず同一研究グループより複数の演題を申込まれる場合には優先順位をつけて下さい。

申込み締切 3月19日(土)

② 幹事会，実行委員を中心にプログラム編成をおこない。

予稿集用の原稿用紙をお送りいたします。

原稿締切 4月20日(水)

第25回 日本脂質生化学研究会講演中し込み用紙 (空印、事務局記大)

[illegible]

会 の 活 動 状 況

① 第24回日本脂質生化学研究会研究集会

第24回研究集会は、仙台市の広瀬川辺に建てられた市民会館の地下ホールと展示場を使用して開催された。

ここの展示場は元来ポスター展示のできる設備、すなわち立派なポスター用のボードが備えつけられていたので、金田実行委員よりポスター可能との申し出があり、一昨々年の暮の在京幹事会で一部ポスターにする可能性ありということで演題を募集、昨年4月13日のプログラム編成作業の際に、リン脂質、糖脂質部門を一括してポスター発表にすることを決めた。ただ赤松幹事は最後まで、講演集とポスターとは同じものになるから意味ないという意見を出して居られたし、当日、所用で欠席して居られた山川幹事からは、後に「オレが出席していればそんなマネはさせなかった」という意見表明があった。

なにはともあれ、研究集会は口頭発表、ポスターの二本建、2会場でおこなわれた。案じていたポスター会場は、第2日目午前11時に第Ⅰ、第Ⅱ会場とも口頭発表を終了、急いで第Ⅱ会場の椅子・机をたたみ、展示ボードを展示室いっばいに拡げた。金田実行委員長自ら机を運ぶ奮斗に、参加者の中から手伝ってくださった方も多かった。成る程、展示室として設計されただけあって、広さも十分、明るさも十分に想像したよりも立派な展示であったし、にぎやかであった。発表者の感想を本気で集めたわけではなかったが、まあまあよかったといってくれる人が多かった。しかし、やはり大勢の人の前で話しをするという緊張感がないせいか、発表者の側にはもう一つ力のやり場がない感じがかり、見る側は、ただ坐っていても耳からはいつてくる口演と違い、目で見、理解をするという積極的努力が要求されるだけに、各演題の印象がいささか薄くなるという感想を述べた参加者もあった。ポスター会場の責任者を飯田幹事と赤松幹事にお願いしたが、飯田幹事は発表側の討論者の居ない展示があると怒っていた。

今回、さまざまな意見のある中で、ポスターの経験を本研究会はしたことになる。しかし事実上は、ポスター展示の設備があったからできたことであって、ポスター展示の設備まで準備することは経済的に不可能である。これを機会にポスター発表

の良否、功罪について十分に議論すべきとも思うが、多くは好き、きらいの感覚的なものになり、また近い将来ポスター発表をする予定もないことから、いつの将来か、ポスター展示をするという問題が出てきた時に、今回の経験をふまえて議論をしたい。

シンポジウムは「過酸化脂質と生体」と題し、12題の演題を集めておこなわれた。尚、前夜祭として、金田、内藤、小暮三氏による過酸化脂質関係の公開講演会が開催され、200人の聴衆を集め盛会であった。

研究集会の開催、運営に当られた、金田尚志教授はじめ一門の方々、また、いろいろな面でご協力賜った木村修一教授に深謝する。

② 24回日本脂質生化学研究会総会

57年7月16日12時より、第I会場で開催された。総会の次第および議事内容は次の如くである。

イ. 挨拶 原 会長

ロ. 昭和56年度事業報告および決算承認の件 植田幹事

57年2月に発行された会報に記載された56年度事業報告について承認を求め、拍手をもって承認された。次いで同会報に同じく記載された決算報告および舟橋会計監査の監査報告書(原会長代読)が提出され、これも拍手をもって承認された。

ハ. 昭和57年度事業計画および予算承認の件 植田幹事

57年2月に発行された会報に記載された57年度の事業計画ならびに予算について一括承認を求め、拍手をもって承認された。

ひきつづき58年度より会費を3,000円に値上げする案が計られ承認された。

ニ. 役員改選の件 原 会長

会則の定めるところにより、会長、庶務幹事、会計監査の任期が57年12月31日に満了するため、58年1月1日より執務する新らしい会長、庶務幹事、会計監査の選出が必要になったが、幹事会より三者留任の提案がなされ、拍手をもって承認された。この三役は4期目になる。

ホ. 第26回研究集会実行委員長委嘱の件

原 会長

会長より札幌医科大学・坂上教授にお願いしたい旨、提案がなされ、満場一致で承認された。

以上、総会議事は無事終了し、ひきつづき千田賞の贈呈がおこなわれた。

贈呈者 佐藤 直樹 鈴木 明身 竹縄 忠臣 の三氏

三氏の今後のご発展を祈る。

尚 千田賞は今回をもって精算し、剰余金は一般会計へ繰り入れて処理することが承認された。

③ 57年度幹事会

57年7月15日12時15分より、市民会館内会議室において開催され、総会に提出する議案の審議がおこなわれた。

また、58年度からの会長、庶務幹事、会計監査三役の改選問題が審議され、今井幹事より留任の提案がなされ、総会に留任を提案することが承認された。

また57年度予算から判断して58年には会費の値上げが必要であることを承認した。それに伴って賛助会費も口数を増やしてもらうよう依頼することにした。

④ 57年度在京幹事会

57年12月7日午後6時より赤門学士会館で開催された。

出席者(順不同、敬称略)

井上圭三、遠藤 章、金子 弘、内藤周幸、赤沼安夫、原島圭二
赤松 稷、脊山洋右、山田晃弘、村松敏夫、石塚稲夫、飯田静夫
植田伸夫、鈴木明身(山川民夫代理)、

坂上利夫(58年度実行委員)、島崎弘幸(事務局) 以上16氏

イ. 57年度事業報告ならびに決算報告の審議

審議の結果、別掲のように決定し、58年度の幹事会の承認を得て、総会に提出することとした。

その結果、千田将学金剰余金13万円余りを含めて収入が予算を27万円上回り、支出が40万円弱下回ったことから、58年度への繰り越し金が80

参加人員 392名(56年 東大阪355名)

提出演題

口頭発表 一般演題 37題

シンポジウム 12題

ポスター発表 47題

計 96題(56年 口頭97題, 誌上19題)

○ 57年会報発行

故安田守雄名誉会長追悼号 20頁

○ 脂質生化学研究24巻発行

57年6月12日 445頁 広告28頁

図書館等無償贈呈 40冊

中国(三景書店経由) 3冊

○ 57年度千田賞贈呈(敬称略)

申請者 3名 該当者 佐藤直樹, 鈴木明身, 竹縄忠臣

審査員 武富 保, 原 一郎, 永井克孝, 植田伸夫

千田賞会計

<収入>

前年度よりの繰越金 396,200 円

利 子 52,742 円

計 448,942 円

<支出>

奨 学 金 300,000 円

審 査 料 12,000 円

用 紙 等 1,100 円

謝 金 5,000 円

計 318,100 円

<差引残高> 130,842 円 → 日本脂質生化学研究会会計に算入

⑥ 58年度事業計画(58年1月1日~12月31日)

○ 会 員 正 会 員

名誉会員 賛助会員

○ 役 員 会 長 原 一郎(昭和58年1月1日~昭和59年12月31日)

庶務幹事 植田伸夫(")

会計監査 舟橋三郎(")

幹 事 新任 木村修一(58年1月1日より4年間)

その他57年と同じ

○ 会報の発行 本誌

○ 脂質生化学研究25巻の発行

○ 研究集会の開催

実行委員 坂上利夫氏(札幌医科大学教授)

⑦ 57年度決算ならびに58年度予算

収入の部 項目	57年度		58年度
	予算	決算	予算
正会員会費	1,360,000	1,316,000*	1,360,000***
入会金	25,000	95,000	25,000
賛助会員会費	230,000	220,000	230,000
講演集売上げ	160,000	218,900	200,000
広告収入	700,000	780,000	750,000
利子	15,000	4,276	5,000
寄付金	0	0	0
雑収入	0	130,842**	0
小計	2,490,000	2,765,018	2,570,000
前年度よりの繰越金	890,806	890,806	798,902
計	3,380,806	3,655,824	3,368,902

支出の部 項目	57年度		58年度
	予算	決算	予算
研究集会補助	300,000	300,000	300,000
会報製作費	180,000	170,000	190,000
講演集製作費	1,550,000	1,355,000	1,500,000
旅費	70,000	75,000	100,000
郵送料・通信費	550,000	451,380	500,000
事務用品費	20,000	9,030	10,000
会合費	100,000	111,572	100,000
謝金	50,000	30,000	50,000
総会経費	30,000	16,740	20,000
事務経費	100,000	100,000	100,000
雑費	300,000	238,200**	10,000
小計	3,250,000	2,856,922	2,880,000
次年度への繰越金	130,806	798,902	588,902
計	3,380,806	3,655,824	3,368,902

* 57年度会費未納91名

56, 57年度会費未納27名

** 千田賞残高

*** 会費2,000円のままで算定

**** 名簿作成費

日本学術会議中央選挙管理会からのお知らせ

昨年12月初旬に本研究会宛、日本学術会議第13期会員選挙について会員諸兄姉に周知方の依頼がありました。

今年11月1日に第13期、学術会議会員選挙がありますが、有権者になるためには有権者登録を2月28日迄にしなければなりません。登録用カードは本研究会を通じても請求できますが、できる

だけ個人で、様式1に従って「はがき」に所要事項を記入のうえ、下記にご請求ください。

様式第1(B5判)

登録用カード用紙請求書

氏名

〒106

東京都港区六本木7-22-34

日本学術会議中央選挙管理会委員長

住所(郵便番号)

第 24 回 ICBL (国際脂質生化学研究会)
のお知らせ

本年 9 月 14 ~ 16 日にフランス, ツールーズで開催されます。プログラムは下記の如くで, 演題は公募して居ります。演題締め切りは, 4 月 1 日です。詳しくは, 京大医学部医化学 沼 正作氏にお問い合わせください。

24th INTERNATIONAL CONFERENCE ON THE BIOCHEMISTRY OF LIPIDS

PROGRAMME

TUESDAY, SEPTEMBER 13, 1983

Welcome to participants
Opening Session at «Grand Amphithéâtre»
Welcoming reception at the Bibliothèque
Organ and trumpet concert at Augustins Museum

MEMBRANE LIPIDS

WEDNESDAY, SEPTEMBER 14, 1983

Morning Session : Dynamic aspects of membrane phospholipid topography
L.L.M. Van Deenen (Utrecht, Netherlands)
Asymmetry and exchange of membrane phospholipids
R.F.A. Zwaal (Maastricht, Netherlands)
Biological implications of membrane asymmetry in blood cells
Poster session and coffee
Short communications
Lunch

Afternoon Session : Structural and functional studies of particular lipids
M. Kates (Ottawa, Canada)
Some new bacterial lipids in extreme halophiles and methanogens
F. Snyder (Oak Ridge, USA)
Metabolisms of biologically active phospholipids in malignant and normal cells
J. Benveniste (Paris, France)
The PAF-acether
Poster session and coffee
Short communications and round tables

THURSDAY, SEPTEMBER 15, 1983

Morning Session : Modifications of membrane phospholipids in activated cells

H. Van Den Bosch (Utrecht, Netherlands)
Mechanisms for the regulation of intracellular phospholipases
C.J. Kirk (Birmingham, UK)
Inositol lipids and receptor functions
Poster session and coffee
Short communications
Lunch

PLASMA LIPOPROTEINS

FRIDAY, SEPTEMBER 16, 1983

Morning Session : Biochemical aspects of lipolysis in plasma lipoproteins
S. Eisenberg (Jerusalem, Israël)
Plasma lipoprotein conversion and remodelling : role of lipoprotein lipase
G.M. Kostner, H. Dieplinger and R. Zechner (Graz, Austria)
Mechanism of action and function of lecithin : cholesterol acyltransferase
Poster session and coffee
Short communications
Lunch

Afternoon Session : Lipid-protein interactions in plasma lipoproteins
W. Stoffel (Köln, FRG)
What can we learn from lipid-protein recombinant systems ?
Y.L. Marcel and R.W. Milne (Montreal, Canada)
Structure-function relationships in human lipoproteins. Application of monoclonal antibodies
Poster session and coffee
Short communications
Closing of the Conference

第 8 回 International Symposium on Drugs Affecting
Lipid Metabolism のお知らせ

本年 7 月 27 ~ 30 日に米国のフィラデルフィアで上記シンポジウムが開催されます。招待講演者によるもので一般演題の公募はありません。

- 第 1 日 Cellular Biology of Atherosclerosis
- 第 2 日 Apolipoproteins
- 第 3 日 Non-Invasive Assessment of Atherosclerosis
- 第 4 日 Drug and Diet

詳細は, 東京農工大学農学部 遠藤 章氏にお問い合わせください。

第16回 Congress of International Society for Fat Research (ISF)

本年10月4～7日に、ハンガリー、ブタペストで、上記のコンGRESが開催されます。予備登録は昨年12月末で終わっていますが、2nd サークュラーが2月に出されますので、今からでも遅くありません。一般演題を募集して居ります。詳しくは、東都医科歯科大学教養部 原 一郎 氏にお問い合わせください。

1. Raw materials for vegetable oil production (plant breeding and animal husbandry).
2. Biochemistry, chemistry and analysis of fatty materials.
3. Biological, physiological, nutritional and clinical effects.
4. Fats and oils processing I. (Unit operations as extraction, etc.)
5. Fats and oils processing II. (Instrumentation.)
6. Fats and oils as food ingredients (food-fat systems).
7. Fats and extracted meals as feedstuffs.
8. Soaps and detergents.
9. Cosmetics.
10. Lacquers (surface coatings).
11. Emulsifiers.
12. Production and utilization of protein from oil seeds for human consumption.
13. Waste materials and their utilization.
14. Environmental protection, ecology.
15. Energy conservation in fat industries.
16. Economy and marketing of fats and oils.
17. Fats and oils packaging.
18. The role of high density lipoproteins (HDL) in the pathogenesis of arteriosclerosis (special symposium).
19. Control of hyperlipoproteinaemias: Prevention, diet and drug therapy (special symposium).

2つの国際シンポジウム

東京医科歯科大学教養部

原 一郎

58年4月の定年を前にしてよくまあと思われませんが、思い立って2つの国際シンポジウムに参加しました。一つは57年6月14日～17日、西ベルリンの国際会議場で、ハイデルベルヒ大学の内科教授であるProf. F. G. Schettler の主宰した第6回国際動脈硬化シンポジウムであります。これは、シンポジウムと云うのには余りにも大きすぎる学会で、日本からも大勢参加され、日本動脈硬化学会や本研究会のリポタンパク質あるいはコレステロール代謝を担当している大部分の方にお会いしたような次第です。ワークショップとポスターセッションを含めた全演題数は71.4題で総会講演としては“動脈硬化症の臨床の問題” “動脈壁と血漿成分” “リポタンパク質と血栓” “疫学的研究と予防” とに分かれており他は分かりかねますので、私はリポタンパク質の項しか聞きませんでした。リポタンパク質ではA. Gotto がリポタンパク質の構造、機能についてくわしく説明し、ついで、R. Havel がトリグリセライドに富む分画、VLDL等の代謝と異常について論述しました。アポEについてR. Mahley が、その遺伝的異常によるアポEの分子種の変化をのべました。これらを聞いていて、リポタンパク質の研究は、やはりタンパク質化学に逆旋回し、タンパク質の生合成へと向っていると痛感しました。エキスカージョンとしてボツダムへ行きましたが、東独へ出る時、這入時の厳重さには些か驚きました。

次のシンポジウムは57年12月6日～8日まで三日間に亘って開催された、第2回“タンパク質、ポリペプチド、およびポリヌクレオチドの高速液体クロマトグラフィ”で、場所はボルチモアのHyatt Recency ホテルでした。HPLCのこの方面の人々(主として、HPLCの理論をやっている人々)のグループが主催し、今回はVariant Associates がサポートしていました。ちなみに第3回はモンテカルロで1983年11月13日～16日に開催されPharmacia Fine Chemicals がサポートするそうです。

このシンポジウムは非常に限られた領域(現状では)のものですが、それでも

300名以上の人が各国から参加しており、日本からも7～8名、さらにアメリカ在住の方を含めると10名位参加していました。発表は講演とポスターとを含めて135題で、題目も多岐に亘っていました。テーマは ① カラム技術と分離機構、② ポリペプチドおよびタンパク質（水溶液、これにアミノ酸分析が含まれます）、③ ポリヌクレオチド、④ 膜タンパク質（界面活性剤を用いるもの）、脂質関係は全然なく、リボタンパク質は私のを含めて2題でした。

HPLCはごぞんじの通り、有機溶剤を用いる逆相系から発達したのですが、普通のカラムクロマトと同様なゲル透過等のカラムが開発され、昨年度から、このようなシンポジウムが発足した訳です。ゲル透過カラムは一応安定した製品が日本から供給されておりますが、イオン交換系はまだいろいろと工夫や技術の改良があるようです。何れにしろこうした技術的問題や工夫が30題近くありました。ついで割合に数多く見られたのが、ホルモン等のリセプターの分離で、非常に有効な武器である事を覚りました。ポリヌクレオチドの分離もよく出来、一本鎖、二本鎖も分れているようです。

以上2つの国際シンポジウムについて散見をまとめました。また本年も数多くの学会に会員の方々が出席されると思いますが御健闘を祈ります。

シカゴ大学留学を顧みて

東京大学 第一内科

寺 本 民 生

私がシカゴ大学へ留学することになったのは、1980年11月であり、アメリカではレーガン大統領が選出され、不況の中、失業率の改善と、昔の“強いアメリカ”に復活するために、教育・研究費などの削減及び外国人の就職に対する風当たりが強くなり始めた頃であった。

私の参加することになったグループは、アメリカに数ヶ所ある Atherosclerosis の SCOR (Specialized center of research in atherosclerosis) のシカゴ支部であった。このグループは、サルの実験的動脈硬化の研究でアメリカの動脈硬化の病理学的研究を10年余リードしてきた Dr. R. Wissler により率いられてきたが、1981年がグラント切り替え期であり、これを機に Dr. R. Wissler は director を退き、私が師事することになっていた Dr. G. S. Getz にその座を譲り、また Dr. A. M. Scanu を vice director とする新体制がスタートすることになっていた。グラント申請に対する NIH による審査は、1981年1月下旬であり、私が行った頃はその準備で大童という所であった、私がシカゴに着くや否や、数百ページに亘るグラント申請内容を渡され、どう思うかと聞かれた時には、さすがに返答に窮したのを覚えている。グラント申請内容の詳述は避けるが、これまでの成果を踏まえ、Dr. R. Wissler の project であるサルにおける食餌による動脈硬化発現機構を解明することが大きな柱であった。大動脈平滑筋細胞、内皮細胞またマクロファージ等の培養系でのリボ蛋白のとり込みや増殖因子の研究が第一のグループで、内皮細胞の増殖因子に関しては山梨医大の三俣昌子先生が、またマクロファージにおけるリボ蛋白代謝については弘前大学の金沢武道先生が研究していた。また、サルのリボ蛋白の物理化学的分析を第二の研究グループである Dr. A. M. Scanu や Dr. F. Kezdy のグループが行い、Dr. G. S. Getz のグループでは、各アポ蛋白、主にアポ蛋白 B と E の生合成メカニズム、及びその遺伝子的コントロールを目的として研究が進められることになっていた。

12月になると、1月のグラント申請の審査に向けてリハーサルが週に1～2度

行なわれ、projectを出した各教授およびその関係者一同が一堂に会し、各々のprojectに対し白熱した議論が行なわれた。むしろ、議論は審査に受かるための技術的なことに終始してはいたが。

十数回におよぶりハーサル後1月下旬にNIHによる審査が行なわれた。NIHからは11名のscientistではあるがリポ蛋白代謝にはあまり慣染みのない面々が派遣され審査にあたっていた。それ故、時には思いもつかぬ質問がでたり、辛辣な質問も多々あった。審査終了後、概略受理可否かの判定がなされ、概ね受理されるであろうとの判定で各教授達も胸をなでおろし、あたかも試験を終えた学生達のように、しばらく休暇をとり休養していた。日本における科学研究費申請の状況とはだいぶん様子が違い、アメリカのグラント獲得の厳しさを示していた。

さて、私はDr. G. S. Getzのもとでサルの体外肝灌流法でアポ蛋白Bの生合成を見るのが主なテーマであった。アポ蛋白Bのheterogeneityは近年注目されているテーマであり、アメリカではKaneらのグループがヒトで、MarshやWuらのグループがラットでその代謝上のheterogeneityについて研究していた。私が観察した内容については他所で発表したので割愛させて載く。

1982年の6月には、その年のprogressを発表するGordon Research ConferenceがNew Hampshire州で行なわれ、私も参加することができ、アメリカに於けるLipid and Lipoproteinの研究の進歩を垣間見ることができた。ここでも感じたことであるが、アポ蛋白やLDL-receptorなどは、その化学的特性、代謝上の役割等が徐々に解明されつつあり、その遺伝子的コントロールまで手のとどきそうな感があるが、リポ蛋白代謝となると、その研究方法自体に新しいものが生まれず、頭打ち状態であるという感が払拭できない。その中で、HoustonのDr. Toru Kitaの発表したanimal modelとしてのWHHL rabbitによるリポ蛋白代謝の解析は注目を浴びていた。参考までにGordon research conferenceのスケジュールを掲載しておく。

確かに、リポ蛋白研究における日米間の差はまだあると思われるが、最近、日本における設備の充実、研究人口の増大、社会的ニーズの増大等好条件がそろっており、近い将来、その差が殆んどなくなるのではないかというのが現在の実感である。

GORDON RESEARCH CONFERENCE ON LIPID METABOLISM

June 21-25, 1982

Kimball Union Academy, Meriden, New Hampshire

Julian B. Marsh, Chairman

Christian R.H. Raetz, Vice Chairman

CELL MEMBRANES AND LIPIDS

Christian R.H. Raetz, Chairman

- Rosalind Coleman - Phospholipid topogenesis in higher eukaryotic cells.
- Christian Raetz - Animal cell mutants dependent on exogenous phosphatidyl choline for membrane biogenesis.
- Michael Sinenski - The somatic cell genetic analysis of the regulation of cholesterol biosynthesis.

LIPID-PROTEIN INTERACTIONS

Michael C. Phillips, Chairman

- G. Graham Shipley - Diffraction and NMR studies of plasma lipoproteins.
- Sissel Lund-Katz - Packing of cholesterol molecules in HDL.
- James Hamilton - Solubility and location of nonpolar lipid in phospholipid surfaces.
- Joel D. Morrisett - Structure of liver perfusate and model lipoproteins resembling nascent HDL.
- Jere P. Segrest - Proton NMR studies of apo A-I/ phospholipid interactions.
- Verne Schumaker - Isolation and characterization of apo-B.

APOLIPOPROTEIN B

Richard Havel, Chairman

- Richard Havel - Current concepts of the metabolism of hepatic and intestinal apo B.
- Nome Baker - Approaches for studying plasma VLDL and VLDL remnant turnover in rats: Apo B and triglyceride kinetics.
- Ronald Krauss - Differences in metabolic relationships of LDL subclasses.

- Scott Grundy - Role of apo B in the regulation of lipoprotein production.

LIPOPROTEIN BIOSYNTHESIS POSTER SESSION

Julian Marsh, Chairman

HDL METABOLISM

Shlomo Eisenberg, Chairman

- Shlomo Eisenberg - Intravascular dynamics of the HDL system.
- Gerd Assmann - Role of LCAT in HDL Interconversion.
- Richard Deckelbaum - Triglyceride-cholesterol ester exchange and lipolysis in modeling plasma HDL.
- Heiner Greten - Functions of hepatic triglyceride lipase in HDL metabolism.

LIPID TRANSFER MECHANISMS

Donald Zilversmit, Chairman

- K.W.A. Wirtz - The isolation and characterization of phospholipid transfer proteins for membrane modifications.
- James Gaylor - Functions of cytosolic proteins in membrane-associated metabolism of sterols.
- Donald Zilversmit - The use of lipid transfer proteins for membrane modifications.

LIPOPROTEIN BIOSYNTHESIS POSTER SESSION

LIPOPROTEIN RECEPTORS

Robert Mahley, Chairman

- Wolfgang Schneider - Isolation and purification of the LDL receptor.
- Robert Mahley - Apolipoprotein E: Receptor interaction.
- Bo Angelin - Regulation of hepatic lipoprotein receptors.
- Allen Cooper and Sandra Erickson - Hepatic lipoprotein receptors

ANIMAL MODELS OF HYPERLIPEMIAS

Paul Roheim, Chairman

- Toru Kita - Lipoprotein metabolism in the WHHL rabbit.
- Daniel Steinberg - Catabolism of LDL in the aorta and other tissues of the receptor-deficient rabbit.
- Lawrence Rudel - Diet-induced hyperlipoproteinemia in African green monkeys.
- Paul Roheim - Peripheral lymph - a model of interstitial fluid lipoprotein composition.

ATHEROSCLEROSIS

Nicholas Myant, Chairman

- Thomas Clarkson - Atherosclerosis pathogenesis - some unanswered questions.

HUMAN HYPERLIPEMIAS

Paul Nestel, Chairman

- Gustav Schonfeld - Thoughts on classifying human hyperlipoproteinemia.
- Ernst Schoefer - Apolipoprotein A-I and A-II metabolism in normal and dyslipidemic man.
- Paul Nestel - Apolipoprotein C metabolism in humans and the relevance of hypertriglyceridemia.
- Gustav Schonfeld - Diet-induced changes in human lipoproteins.

英語雑感

帝京大学医学部第1生化学
植田伸夫

もう何年も前のことになるが、ロンドンに10日余り滞在したことがある。日曜日の朝、ストーンヘンジを見に行こうと志をたてて、ウオータールー駅へ行った。切符売場に年配のオバサンが座っていた。「9:30のソールスベリー行きの切符を1枚」といったら、何か云っているが聞きとれない。二、三回聞き直したらそのオバサンがこのワカラズヤという調子でどなった、「ツダアイノサンダイ、トライン……」。途端に思いだした。ロンドンのガイドブックに下町生れのロンドン子の言葉はキングスイングリッシュではない、「エイ」がみんな「アイ」になるから気をつけろと書いてあった。Todayyが「ツダアイ」、smudayが「サンダイ」Trainが「ツライン」。要するに、今日は日曜日だから9:30の汽車はないよということだったらしい。

小生は英語に強くもないし、詳しくもないので、ロンドン下町の発音が本当にそういうものであるかどうかよく知らない。また、どういう階層の人達がそういう発音をしているのかも知らない。そう簡単に、江戸っ子のペランメエに相当するなどといっけいはいけないのであろう。

ところがこの夏、オーストラリアでこの言葉に出会った。しかもいっぱい。シドニーでも、国際生化学会の開催されたパースでも。その両都市を結ぶインデアンパシフィック鉄道の中でも「ツウダアイ マンダアイ」。パースで乗ったタクシーの若い運転手君も美事にこの発音をしているから聞いてみた。「学校ではツデエイと教えるのツダアイと教えるの?」「ツデエイと教えるね」「でも君はツダアイといっているじゃないか、どっちが正しいと思うの?」「そりゃ、ツダアイが正しいさ」「なぜ?」「皆んな、子供の時から使っているもの」。岩手県で学校の先生が一生懸命、標準語の発音を教えている風景が何となく思い出された。

オーストラリアは、17世紀初頭からオランダ人が西岸北岸に入植、学会の開かれたパース、その外港のフリマントル辺りは、オランダ東インド会の支配下にあったようである。それに対しイギリスは1770年のキャプテン、クックの東岸、シドニー近辺への上陸から、東部地域の領有を宣言し、1788年から流刑植民地と

して利用され始め、1840年までに10万余人の犯罪人が送り込まれたという。この間、オランダはイギリスに破れ、オランダ東インド会社は解散し、西部地区もイギリスの支配下にはいつていったということである。この10万の受刑者がイギリスのどの地方から主に送られて来て、彼等がどんな言葉を話し、彼等がどのようにオーストラリアの大地に定着して行ったのかを十分に検証しないで(— きっと、そういう検証はあるのであろう。小生が知らないだけかもしれない)軽々しくいうべきではないが、当時の世界の大都市ロンドンは工業都市でもあり巨大なスラム街をかゝっていたことでも有名である。恐らく、犯罪も多発したであろう、ロンドンの下町っ子とオーストラリアっ子とは兄弟なのかもしれない。

学会のポスター展示会場。我々のポスターの前に一人のアメリカ人が立った。そして曰く、日本人の英語はわからんと。小生、同行のT君と共に、ここで負けてならじと、何かの本で読みかじったことを思い出して「世界で一番バリエーションに富んだ言葉は、どこ言葉か知っているか。それは英語だ。イギリス英語とアメリカ英語は違う。ましてやここオーストラリア英語ときたらまたまた大違いだ。フランス英語、ドイツ英語みんな違う。日本にだってJapanease Englishというのがあるんだ。わからなかったら、もう一度読んでみてくれ。これだって英語の一種だ。」といったら、驚いたことに声を出して読みはじめた。そして今度は理解してくれたらしい。しばらく、自分の仕事の話、日本の友達の話をして、握手をして去っていった。小生の英語は将にJapanease Englishであることを自認している。上のように日本語で書けば、何か流暢そうに見えるが、その実、外人の話すテニオハの抜けた日本語でも何とか理解できる。その逆をまかり通らしているに違いないと思っている。

言語、文章は通信手段であることが第一義であらう。それが芸術であることは二の次といったら叱られるかもしれないが、その人の言葉、文体はその人の生れ育った土地、環境の香りを根深く持っているものだと思う。というのは、英語がちょっともうまくならない云い訳けであるかもしれないが、意味さえ何とか通るなら、堂々とJapanease Englishを世界に持ち出せばよいと思う。日本人同士日本人の書いた英文はよくわかるし、日本人の話す英語はよくわかる。

きっと我々は、英語、その日本方言を共通して使っているのではあるまいか。

編 集 後 記

今年のお正月は、東京もまことに好天でした。どこへも出かけずに15階の自室から筑波山、日光男体山、榛名赤城、そして秩父の山々、富士山、箱根の山々、そして伊豆半島の山波をながめまわしていました。

そんなことで会報作成のスタートが1月10日すぎになって、あわただしい原稿のお願いをしてご迷惑をかける次第になりました。そのあげく、自分の原稿で穴埋めをするはめになりました。

今年は、研究集会が1ヶ月早くなっているからご注意ください。北海道の最も快適な季節が選ばれましたので、前後のご計画はお早目に。

(植田 記)

賛 助 会 員 (50音順)

エーザイ株式会社
株式会社大阪細菌研究所
株式会社大塚製薬
小野薬品工業株式会社
共立出版株式会社
三共株式会社
塩野義製薬株式会社
株式会社資生堂
住友化学工業株式会社
第一製薬株式会社
大日本製薬株式会社
株式会社東京化学同人
東京田辺製薬株式会社
富山化学工業株式会社
株式会社中山番店
日本新薬株式会社
日本凍結乾燥株式会社
日本ルセル株式会社
藤沢薬品工業株式会社
株式会社ヤクルト本社
山之内製薬株式会社
雷印乳業株式会社

以上22社